
夜の歪～ヨノユガミ～

ナモナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の歪〜ヨノユガミ〜

【Nコード】

N7589E

【作者名】

ナモナ

【あらすじ】

気がつけばいつもの道を歩く男。あまりにも見慣れた風景を眺めながらも、何故かいつもと違う違和感を感じる…。そして見慣れた風景は見慣れぬものに…。

序章「知らない風景」（前書き）

序章です。

主人公たちの名前も明かしません。

情景描写であってるのかな？序章はそういう描写ばかりで作っております。

序章「知らない風景」

ドアを開けば、涼しい風が肌を撫でていった…。

この季節には珍しいなと思ひながらも視界に映るいつもの道、いつもの風景、殆ど変わり映えしない見慣れた世界に嫌気もさすことなく、玄関から見える森と小さな川を眺めながら一歩踏み出し、川沿いの道を右折する男。

左手から川の音と木々のざわめきを心地よい音だと感じながら、歩き慣れた細い道を歩む。

まるで生活音が聞こえない静かな雰囲気、若干の違和感を感じながらもただボーっと小さな川を眺めながらゆつくり歩を進める男ではあるが、何故車の音が聞こえないのだろうか？何故新しく家を建設中の工事現場からけたたましい音が響かないのだろうか？一つの疑問は二つの疑問に、二つは三つに、そしていくつもの疑問が積み重なっていく…。

「…不思議な違和感もあるもんだなあ。……今何時だったわけ？」

手首を見れば時計はしていなかった…。

携帯電話を取り出し、適当にボタンを押してみれば何故か光は灯らず、いつの間にか電池切れになっていたことを男は知る…。

しかし西の方角、木々の向こうから零れる西日の光でおおよその時刻を割り出すことが出来た。

「…この感じだと4時半はとっくに過ぎてるな…」

西に傾いたにしては明るく感じられる太陽とは反対に、東の空は薄っすらと朱色に染められ、鮮やかなグラデーションが出来上がるまで後少しだった…。

空を眺めながら、ただ気の向くまま川沿いの道を歩き、森から聞こ

えてくる鳥の声に耳を澄ます男…。

どうして散歩なんてしているのだろうか？

玄関を出るまで自分は何をしていたのだろうか？

あまりにも思いつけない数分前に、自分自身に、違和感を感じられずにはいらなかった…。

そんな男はひたすら歩くものの、見慣れた風景が見慣れたものでは無いことに気付き、あまりにも度が過ぎる非現実的な光景に冷静さを失いそうになる…。

「…なんで十字路が消えてるんだ…？！」

五分も経たない内に、いつも通る見慣れた十字路が現れるはずだったこの道…。

おかしなことにその十字路は存在せず、それが当たり前だったかのように一本道が続き、川と共に森へと続いていた。

この時点で家に引き返せばいいのだが、男は何か引き寄せられる様な感覚を感じ、知らない世界へと足を踏み入れる…。

「…おかしい、おかしい。…ほんとおかしい…」

歩けば歩くほど、知らない世界に様々な気持ちが溢れてくる…。

違和感に恐怖を感じつつも、シンと静まり返った森の中は不思議と安らぎに包まれ、冷静さを欠いているはずなのに冷静さを保てている錯覚を覚える男…。

川の水がとても澄んでいた…。

深い森に僅かに差し込む太陽の光を浴び、水面が綺麗に輝いていた…。

「…この水、飲めそうなくらい綺麗だな……」

少しずつ広くなっていく道を歩きながら、見たこともない風景に溶け込みながら、知らない世界に対する興味が湧き上がる。

何故引き返そうとしないのだろうか？何故歩いているのだろうか？それはこの見たこともない知らない世界を知りたくなったからだろう…。

この先には何があるのだろうか？広くなつた道に生い茂るふわりとした青々しいコケを踏みながら、暗さが増した森を進む男の目に、古めかしい小さな木の橋が川の向こう岸に架かつていた…。

橋の先にはまるでトンネルを思わせる程の木が道を覆い、その先には光が溢れ、森から抜けられるかもしれないと男に思わせる…。

この先には何があるのだろうか…？

進まなくては先を知る事は出来ない。

進まなくては先を見る事が出来ない。

戸惑いながらも、土の軟らかさを感じつつ地を踏みしめ歩く…。

小説

「夜の歪」

序章

—知らない風景—

暗い木のトンネルを歩き続けていたはずなのに、いつの間に風景が変わったのだろうか？気がつけば右手に広い川が静かな流れを辺りに響かせながら、太陽の光を浴びキラキラと輝いていた。

相変わらず道は延々と続き、眩しいはずなのに眩しくない太陽に向

けひたすら歩く男…。

どれくらい歩いたかなど、すでに分からなかった。

何故こんなにも長いこと歩き続けるのだろうか？

自身に問いかけながらも、答えは道があるからなのだろう。

怖くはないのか？

自身に問いかけながらも答えは有耶無耶だった。

「頭、どうかしたんだろうな…。きつと…」

森で踏みしめた土とコケではない砂利道を歩く…。

いい加減夢なら覚めてくれ…。そう思う男は手頃な石を拾い、川目掛けて力任せに放り投げるが、石はとても空しい音を響かせながら水面に消えていった…。

そんな光景を目の当たりにしながら溜息を吐き出す男…。

「…いてて…。足が疲れた。…これ、夢でもなんでもないかもしれない…。なんでこんなに疲れを感じるんだよ…」

体の疲れから、自身は相当な時間を歩いたのだろう。と、男は考えても見たが、先ほど見た太陽は少しも沈んではいなかった…。

体内時計では、すでに一時間は過ぎ去っていてもおかしくはない感覚であるのに、男が眺める太陽はただそこにあるかのように、飾り物かのように、ただ光を辺りへと降り注いでいた…。

「…太陽…綺麗だな…」

人っ子一人、他人の存在さえも感じられない一本道は何処まで続くのだろうか？

この果てしない道の先に何があるのだろうか？
考えても考えても答えは導き出されず、更なる深みのある溜息を吐

き出すと、頬を伝う汗が地へと落ちていった。

小さな水滴が落ちる先を眺めてもただ、砂利があるだけ…。

地面を眺めながら男は何も考えないようにしよう。そう、思ったその時だった…。

チリリリーン

「……………」

この音は一体なんだ…。男は自身が耳にした音に心当たりがあるものの、突然鳴り響かれてはそれがなんであったか思い出すことが出来なかった。が…。

「いや、思い出せないはずがないじゃないか…。そう、夏にこんな音、涼しくて風流な…風鈴だっ」

そうして顔を上げた男の目の先に赤い門が立ちふさがっていた…。

「…………」。森、川、次は赤い門？…もう何が起ころうともビククリしないね。あはは……………」

そういいながらも、一步を踏み出せない男は川のせせらぎと、赤い門の先から聞こえてくる風鈴の音に耳を澄ます。

ちよつとやそつとの出来事では驚かなくなったものの、あらゆる疑問に対して納得のいく答えが導き出せず、苛立たしさが込み上げるだけ…。

その嫌な感情を沈めてくれそんな音色に耳を澄ますが、この感情を生み出したものがなんであるかを思うと余計苛立たしくなる…。

赤い門の先には山が見えた…。

川もその山に続くように静かな流れを守り、赤い門の、小さな集落がある村の先へと続いていた…。

「茅葺屋根……オレの地元は都会とはいえないけど、こんな茅葺屋根のある家なんてなかった……」

チリリン……。

風など吹いていないのに聞こえてくる風鈴の音がやけに気になり、その気になる音はあの赤い門の先に……。

あの赤い門の先には何があるのだろうか？

立ち止まっていたおかげで、僅かではあるが体力が戻った男には進むことしか出来なかった……。

そう、すでにあの森の道は存在せず、引き返そうにも引き返すことの出来ない状況なのだから……。

「休めるところあるかな……」

赤い門に近づいてみると、雨風の所為なのだろうか？

何年もの間、雨風に耐えてきたのだろうかと思わせる程、古めかしく所々朽ち始めている門。

以前は真つ赤な色に染められていたのだろうが、何年もの間雨風に耐えてきたその門は、砂埃が付着し強弱様々なドス黒さと、赤の名残が少し残るものの不気味な彩りを描いていた。

その汚れに若干の嫌悪感を抱く男は、門の門がされていないことを確認し、風鈴の音が今も響き渡る集落へと足を踏み入れる……。

「……綺麗なところじゃん。……この石畳なんて特に観光地を思わせるね。……だけど……」

誰もいなかった……。

あまりにも生活観がある集落に誰もいないとはどういうことなのだろうか？

古都を思わせるような木造作りの民家、観光地を思わせる石畳、古びた筒状のポストと電信柱……。

静けさが何処までも広がった集落に一際目立つ風と風鈴の音色……。

こんな落ち着いた村に誰もいないなんてあまりにもおかしいと思う男。

「あははっ、ちょっと待ってよー」

「っ！」

唐突に声が聞こえた…

だが、声がした方へ視線を送れば紙クズが風に転がされているだけだった…

呆然と立ち尽くす男に、幻聴としか考えられない音が何かに反響するかのよう響く…

「…あああ！……やばい、そろそろ本当にやばい。……頭がおかしくなりそうだっ……！」

ガクツと膝に手をあて、うな垂れる男はブツブツとそう呟きながらなんとか体を起こし、焦りを感じながらも急がずに集落を歩き出す。これから自分はどうなるのだろうか？ずっと誰とも会おうことなく彷徨い、やがて死んでいくのだろうか？

最悪の事態だけは避けたい男ではあるが、すでにそうなりかけている事実もまたここにある。

手短に窓が少し開いている民家を覗き込む。

「……誰もいないなんておかしすぎる。なんでこんなに部屋の中は汚れ一つ無いんだ？誰もいない集落ならもっと汚れているはずなのに……」

今さら何をいつているのだろうか？そう思いながらも男は次々と覗き込みそうな民家に足を運び、落胆を繰り返す。

空全体が朱色に染まっていた頃には疲れが限界にまで達し、ひたすら歩き続けていた男にはもうその力は無く、いつの間にか集落の小さな神社の片隅で地面に行列を作る蟻を眺めたため息を何度も吐いていた…

脳から発せられる言葉は「疲れた」の一言のみで、疲労感が溜まったまま、静かに蟻の行進を眺め、時折山の向こうへと消え去った太陽の光を眺めながら周囲の山々から聞こえてくるひぐらしの鳴き声に耳を澄ます…。

驚く程の哀愁を感じさせるひぐらしに、いつか感じた今と同じこの季節への懐かしさが男に過去を思い出させる。

夕空を羽ばたくカラス。

疲れを癒す為、我が子に食糧を届け与える為、彼らは力強く羽ばたき巣に戻るのだろうか…。

小さく聞こえる鳴き声はひぐらしのソレに掻き消され、僅かに聞き取れるくらいだけだった。

「あいつらには帰る場所があるんだな…」

疲れの所為なのだろうか？それとももっと他に原因があるのだろうか？

山の向こうへと消えていくカラスを羨ましそうに眺め、生命の営みを感じつつも、自身は生きた心地などこれっぽちも抱けない…。

未だ聞こえてくる風鈴の音色は、一体何処から鳴り響いているのだろうか？

まるで男に見つけてほしいのかと思わせるくらいに、どんな大きな音に掻き消されようともその音色だけは微かに聞こえ、この夕闇空に包まれた集落に鳴り響く。

意味も無く小さな神社を見渡す…。

白くて小さな綺麗な砂利、大きくたくましいご神木、その根に腰を落とし両膝に両腕を乗せ、だらしなくもあるがとても楽な姿勢の男。長い行列を作る蟻たちは何処まで歩くのだろうか？

働き熱心な彼らは小さな粒、食糧を運んでいた。たとえ僅かな食糧であっても彼らにとっては貴重な食べ物である。

「蟻さんこんにちは。…ところで此処って何処？帰り方教えてくれない？」

蟻に話しかけ空しさを感じる男は、何処からとも無く聞こえてくる風鈴の音色に再度耳を傾けるが、もはやその音色は空しさを紛らす為にしか効果が得られなかった…。

この集落には何故人が存在しないのだろうか？生命の営みは感じられても、生の存在はまるで感じられず、途方に暮れるのみ…。

「…門は消えるし、道を進んでも同じところをグルグル回るだけだし、最悪なことばっかだわ…」

そう、いつの間にかあの古めかしい門は消えていたのだ…。まるでこの集落から抜け出すことを許さないかの様に…。最悪な出来事ばかりが舞い込んで男を苦しめる現実と非現実。

死んだ魚の様な目に映し出されるのはせつせと働く蟻たちの姿だけ…。

「…ああああっ！…ム力つくっ！」

ありえない現象にストレスも極限にまで高まった男。

カラスが消えていった遠くの山を眺めながら、無理だと分かりつつも更なる冷静さを得る為、深く深く深呼吸をするがただの溜息となんら変わりなかった。

静かに立ち上がり、力無く歩き出す男の背中はとても落ち込んでいたが、全てに諦めがついた訳ではなさそうだ。

神社の鳥居を潜り、二十段はあるであろう石の階段を下る…。

空腹の所為で体力が戻らない体が忌々しく、汗ばんだ服に不快感を感じ、肌を刺す蚊に苛立ち、極めつけはトドメといわんばかりの眠気にかんりのやる気を無くす男はかなり精神的に参っていた…。

「此処で倒れたい……」

静かにそう呟くと同時に、灯籠の中にある電球が小さな明かりを灯す…。

淡く白い光を灯す灯籠と時を同じく、頭上で光を灯し始めた街頭に刻一刻と時間を刻んでいることを男に感じさせ、その明かりで作られた自身の影を見つめる男はある異変に気がついた…。

光が照らし出す影が二つあったのだ…。

「…おい」

「…！？」

ビクツと体を一瞬震わせ、金縛りにでも掛かったかの様にピタリと硬直する男…。

我が耳を疑う男の背後から聞こえたのは、妙に落ち着いた女性の声だった…。

唐突な出来事に体中から血の気が引いていきそうな感覚を覚え、体中に鳥肌が立つ。

故に驚きを隠すことが出来ない男は、背後からかけられた女性の呼びかけに恐怖を覚えつつも、何処か安心する自分を感じずには居られなかった。

だがそう感じていても、振り向こうにも振り向くことが出来ないのは何故だろうか？

振り向いたら襲われるかもしれない。振り向いても誰も存在しなかったらどうしよう？

様々な思いが脳内を廻りながらも、あることに気がつく男は思わず大粒の涙を流す…。

「振り向こうが向くまいが、どっちみちもう遅い！背後取られてるじゃんっ…！し、死ぬっ…殺されるっ…！」

「…見慣れん奴だな。……旅行者か？」

突然話しかけ、驚かせたのかもしれないと思った女は、極力穏やかな声で背中を向ける男に問いかけた。

だが、女の気遣い空しく、ガタガタと震える男は戸惑いをあらわに口ごもりながら問いに答えようとした。

「…あ、あのっ…。えと、その…」

「…?…どうした?だ、大丈夫か?」

ゆつくりと、亀も驚くほどの鈍さで背後に立つであろう女に振り向く男は、薄暗い闇の中で薄っすらと光を浴びた黒い着物姿の女を視界に捉え、様々な感情が大津波となって溢れそうになり、そして爆発しそうだった…。

「…こ、ここ!こんばんはっ!…じ、じつじつ実はっ、迷子の迷子のっですね!…そそそれで…汗は減ったわ。…ししかもお腹は眠たいわ。…もう訳が分からなくて子猫ちゃんなんですっ!」

あまりにも取り乱した男の姿に、フツと笑みを漏らす女…。

その表情はとても優しさに満ちていたが、極限にまで達した精神的疲労にその表情を見ることも感じることも出来なかった男は相変わらず体を小刻みに震わせていた…。

「…大丈夫。大丈夫だ…。私はこの神社を管理する者。…相当お疲れのようだからついて来い。此処の夜は危険だからな…」

そういつて震える男の手の平を包みこみゆつくり歩き出す女。

半強制的ではあるが、ようやく人と出会えて僅かながらも落ち着きを取り戻した男に出来ることは、薄暗さが増した細道を女に連れられるがまま歩くことだけだった。

これからどうなるかはこの際どうでもよかった。

それは男が今求めるものが、安らかなひと時だけなのだから……。

いつの間にか集落は季節特有の虫の優しい音色に包まれていた……。

第一話につづく。

序章「知らない風景」(後書き)

読んでいただきありがとうございます。
また見てね。相当妄想はいつてるけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7589e/>

夜の歪～ヨノユガミ～

2011年1月13日03時05分発行